

編集後記

今号は研究論文が8編、研究報告が7編、プロジェクトの成果であるメダリストの軌跡が9編、視察報告が2編、事業報告が1編の内容で発行することになりました。研究論文の各テーマは、阿部論文が行政論、松瀬論文がレガシー研究としての指導者論、日比野論文がエリートスポーツの政策論、佐藤論文が新種目の空手道に関する研究、波多腰論文が教育プログラム論、関根論文がオリンピック哲学、菅野論文がオリンピックの歴史文化研究、成田論文がアンチ・ドーピング研究と、多岐にわたっています。いずれも2名の査読者の審査を経て掲載されました。研究報告では各プロジェクトの研究概要を知ることができます。メダリストの軌跡に関しては、これまでの分と合わせて書籍化する計画が進んでいます。これら一連の成果は、オリンピックの結果（勝利）至上主義化に別の道を示すものといえるでしょう。クーベルタンが考えたように、オリンピックが教育改革、生き方の創造であるという原点を想起させる内容が盛り込まれています。

当初は完全な「学内誌」の性格で発刊した本誌ではありますが、学外の方からも投稿いただけるようになってきました。前号では筑波大学（現仙台大学）の荒牧先生から、今号は名桜大学の菅野先生から投稿いただきました。しかしながら本誌が広くオリンピックに関する議論の場となり、論文公表の媒体となるためには、投稿規程を改訂すると同時に原稿作成要領も明確にする必要があります。本誌がより広く社会に貢献できるようにするために編集委員会で様々な点を議論し改訂していきたいと考えています。本誌がオリンピックについて研究した成果を公表する媒体として機能し、広く読まれるようにするために、本誌のあり方についてご意見をいただければ幸いです。

最後になりますが、今号に寄稿していただいた方々ならびに審査の労をお執りいただいた方々に対し、お礼申し上げます。

関根 正美